

奉納品のなかから

岐阜市歴史博物館学芸員

眞理子

伊奈波神社に奉納された宝物のなかには、刀剣や狛犬など神社の什物としてふさわしい作品ばかりではなく、意外なものも含まれています。岐阜市歴史博物館でお預かりしているなかでは、高橋杏村（たかはし きょうそん）の手になる山水図があげられるでしょう。

縦二二九センチ、横五八センチの掛幅で、絹地に墨で山水を描いたうえに、山容や樹木の幹、建物、岩に淡く代赭（たいたし）（赤色の顔料）で着色しています。このような作品の品質を博物館では「絹本着色」と呼びますが、絹本は紙に描かれたものに比べて力の入った作品が多く見られます。山容は高く険しく、中

景には網代垣に囲まれた門扉を構える建物、前景には質素な家があり、内部には花を活けた文机を脇にして琴をひいているらしい人物が見えます。左上部には「移宅長追猿窟蹤 琴書

復好伴疏慵 人間多少誰容我 々亦悠々不覓容」の七言絶句と「乙丑冬日擬董玄宰画法 杏村詩画」の署名があります。詩は「はるかに猿や鶴の跡を追つて山奥に家に移した。琴を弾しみ書を読むものうい暮らしは心になかなうものだ。世間には多くの人がいるが誰が私を受け入れてくれるだろうか。私もまた悠々として人に容れられることを求めはしない」という意味で、世俗を離れた地で送る悠々自適の暮らしへのあこがれを詠んだものです。杏村の心は、ふもとの質素な家屋の人物へと向けられているのでしょうか。

作者の高橋杏村（一八〇四～一八六八）は、美濃国安八郡神戸村（現在は岐阜県安八郡神戸町）の豪農の家に生まれました。大手生糸業者で横浜財界のリーダーであり、「三溪園」を開いた原富太郎（三溪は号）は、外孫に

もう一点、少し変わった奉納品を取り上げたいと思います。それは、ロシアで造られたモシン・ナガンというタイプのライフル銃で、平成一七年に伊奈波神社から博物館に御寄贈いただきました。

全長三三〇センチ、銃身の長さ八〇センチ、重さは四・四キログラムあり、五発の銃弾が装填できます。銃身にはロシア語で「皇帝のツーラにある兵器の工場一九〇二年」と刻印されています。



銃器に詳しい方の御教示によると、ツーラ造兵廠（ツーラ せいへいしょう）はロシアを代表する兵器工場で、モシン・ナガン銃は一八九一年を最初として、小さな改造をしながら一九五〇年まで生産されました。ロシア以外に中国で

も使用されていますが、伊奈波神社に伝えられたものは日露戦争における戦利品が奉納されたのではないかと考えられます。

明治三七年（一九〇四）から翌年にかけて日本とロシアとの間で戦われた日露戦争は、一〇年前の日清戦争にくらべて軍事費は約八倍におよび、日ロ双方に一〇万人を超える戦死者を出しました。日本国内では働き手や牛馬を奪われた農村は荒廃し、戦費調達のための増税は市民生活や教育現場などに大きく影響を及ぼしました。出征した兵士の五分の二が戦死し、同じく五分の一は廃兵またはそれに近い状態で帰国したといえます。労働力を失った家族の困窮はいうまでもなく、無事に帰ることができても不況の中で働く場がない状態でした。

内務省は明治三九年に日露戦争の戦利品を配与するための寺院調査を各県に命じ、翌年から寺院や学校に大砲・砲弾などが配られました。現在も各地の神社などで、このときの奉納品を目にすることがあります。明治四〇

当たりります。杏村は若くして京都で南画を学び、帰郷後は梁川星巖に漢詩を、さらに幕末三筆の一人にあげられる書家の貫名海屋（ぬきな かいおく）に書を学びました。さまざまな教養を身につけ、美濃を初めとする文人や、大垣藩の小原鉄心・同藩主の戸田氏彬など幅広い交際をもちました。山水図だけでなく、花鳥・人物画も巧みで、美濃の三大画人の一人に数えられています。漢籍や画法を教授する私塾も開き、門人は尾張・近江・三河にまでおよび、最盛期には二〇〇人を超えたといえます。「乙丑」は慶応元年（一八六五）、杏村六歳の作品です。

南画とは、中国南宗画の影響を受けて、江戸時代中期から日本で盛んに



描かれた絵画です。文人画とも呼ばれ、自らは見ることの出来ない中国風景へのあこがれを、自分の心の風景として描きました。文末の「董玄宰」は、中国・明の官僚であり書画にすぐれた董其昌（とう きしやう）（二五五～一六三六）のことで、その作品は日本の知識人の間で高い人気を得ました。杏村も、その技法にならつてこの作品を描いています。

本作品が伊奈波神社に納められた経緯は、わかつていません。以前にある寺院の宝物を拝見したとき、寺院のイメージとは遠い美人図などが含まれているのに驚いたことがあります。大社名利には多様な物を引き寄せる力があるのでしょうか。あるいは、杏村の交際相手からの奉納かもしれません。

年七月には、伊奈波神社・洲原神社などに「速発歩兵銃」などを配与するところが決まっております。このモシン・ナガン銃もその中に含まれていたのかもしれないとせん。

『伊奈波神社略誌』（昭和一六年発行）には巻末年表の明治四〇年六月の項目に「末社愛宕神社前石垣修築成り、明治三十七八年戦役忠魂碑ヲ建テ陸軍大臣寄進ノ戦利品大砲砲弾等ヲ配置ス」と書かれています。このころは、日露戦争で戦病死した多くの将兵を慰霊するため、そしてその忠勇を市民に示して国家への忠誠心を養うために、県内各地で忠魂碑が建てられた時期です。当時の

新聞によると、伊奈波神社に忠魂碑を建立することは岐阜市議会で決議され、費用の一萬五千元は寄付によって集められまし



た。明治四〇年九月に基礎工事が始まり、来春までに完成の予定と報じられています（『伊奈波神社略誌』に述べた明治四〇年六月は愛宕社の石垣ができた時期を示すのでしょうか）。神社参道脇の駐車場に現在も建つ「明治卅一（一三〇）七八年戦役 岐阜県下戦病死者 忠魂碑」がそれで、文字は乃木希典（乃木 きたか）の手になるものです。

この忠魂碑は、近代日本の歩みを語る巨大なモニュメントです。伊奈波神社を訪れたときにはこの碑を仰ぎ見て、近代日本の歴史、そして戦争と平和について考えていただければと思います。

伊奈波神社の獅子頭

岐阜市歴史博物館学芸員

箕 真理子

このたび、岐阜県博物館に寄託されていた獅子頭を岐阜市歴史博物館でお預かりすることになりました。これは約四〇〇年前の慶長二〇年

漆が施されています。鼻柱の裏側に当たる部分には「御因幡大菩薩」、上顎には次の墨書銘があります。

(二六二五)制作で、岐阜県重要文化財に指定されています。高さ三〇センチ、幅三九センチ、奥行き四二センチで、全体は黒漆、耳・鼻孔・口には朱漆が施され、目には銅板をはめた、迫力のある姿です。歯には金箔が貼られ、前歯の上五本・下六本に鉄板をかぶせて、かみ合わせたときカチカチと鳴るようになっていきます。後部にはぐると、幅約九センチの麻布が四角い和釘で打ち付けてあります。鼻から顎を中心にして二面に同じ大きさの小さい打ち傷があり、右耳は後の補修で、目の銅板も修理されたものと思われませんが、それ以外はよく保存された作品です。

「濃州厚見郡岐阜
大工 福竹宗左衛門
袖 松山彦□□
ぬり 神崎伝右衛門
朱 波多藤□□
かな具 平田九郎次郎
はり太彦右門
慶長式拾年乙卯二月吉日
塩谷□太夫」

口内には舌が彫り出され、全体に朱

木を伐り、刻み、漆を施し、金具を造ったこれらの人物について詳しいことはわかっていませんが、いずれも岐阜町の人たちと思われる。下顎の左右に打った二本の鉄棒が、顎内を左右に渡した鉄棒に通されており、自由に口が開閉できます。かぶつたときには鼻孔から外が見え、下顎の

後端には持ち手がついています。重さは五キロもあり、自在に扱うにはかなりの腕力が必要です。

獅子は前近代の日本人にとっては見ることがかなわない動物でしたが、最強の猛獣として知られていました。獅子頭をかぶつて舞う獅子舞は、場を鎮め、悪霊を払うために古くから各地で演じられており、お正月に各家を回る獅子舞は馴染み深いものでしょう。現在の伊奈波神社では、四月の御神幸祭で獅子が行列に加わります。しかし、江戸時代の伊奈波神社祭礼に獅

子舞が演じられた記録はなく、この獅子頭がどのような場で使われていたかは不明です。一面に残る傷が「おひねり」を受けた跡だとすると、人びとの喝采を受けていたようですが想像されます。



御祈禱のご案内

何故「祈禱を受けるのでしょうか？」

私たちは、一生のなかで折目や節目にさまざまな儀礼を通して歳を重ねていく事が遠い祖先から伝えられてきました。その人生儀礼を受けることにより新しい風を入れます。心豊かに清々しく生活を送ることが出来ます。それぞれの折目、節目に神さまに奉告感謝し、さらなるご加護を戴けるように、ご祈禱を致します。

家内安全

家族が健康で、円満に日々の生活が過ごせますようにお祈りします。新年を迎えた際、またご家庭で定めた日に一年間の安全を、祈願下さい。

安産祈願

妊娠してから五か月目の戌の日(犬の多産にあやかり)に腹帯を巻きますが、その前に無事に生まれるよう祈願し腹帯をお祓い致します。腹帯をお祓い致しますのでご持参下さい。神社でも腹帯をお頒ちできます。三〇〇〇円(さらしタイプ)

初宮詣

お子様が産まれてから三十日前後、初めて神社にお参りする事を、「お宮参り」や「初宮詣」と言います。神様に赤ちゃんが無事誕生したことを報告することにもこれからの健やかに成長するよう祈願致します。お子様の体調やご家族皆様の都合のよい日を選びご参拝下さい。

厄除

古くより厄年の歳廻りは厄災が起りやすい年齢として、その年を忌慎みて過ごす習わしがあります。一年間を何事も災い無く平穏に過せるよう祈願致します。厄年の前後、前厄・後厄も徐災の祈禱を致します。

車祓

車を購入した際、また一年に一度、車を清めて無事故で安全に乗って頂くよう祈禱します。まず、御神前で交通の安全を祈願した後、車のお祓いをいたします。 ※お車は、参集殿前の階段下にお寄せ下さい。

祈禱初穂料

五千円・二万円・二万五千円
以上おごころざし

お願い

祈禱殿内は撮影禁止となりますので、ご了承ください。

御祈禱の流れ

受付

参集殿一階にて受付しております。申し込み用紙に記入し、初穂料をお納め頂きます。



参集殿

控え室

申し込み後、二階の控え室にて、お待ち頂き、準備が整い次第ご案内致します。



控え室

ご祈禱



祈禱殿

撤下品授与

ご祈禱後、お祓いしたお守り等をお渡し致します。

※車祓の方は、この後にお車のお祓いを致します。



車祓